

利用者の属性に合った内容で話しかけてくる、 “AIデジタルサイネージ”ならそれが実現可能。

(株) ACCESS

来年、創立40周年を迎えるソフトウェア開発会社である(株)ACCESS。今年6月に開催された「デジタルサイネージ ジャパン2023 (以下、DSJ2023)」の同社のブースでは、話題のChatGPTを活用したデジタルサイネージ(以下、サイネージ)が出展され、注目を集めた。ここでは、ACCESSが取り組む最先端サイネージについて紹介する。

生成AIと3Dアバターを組み合わせたサイネージ

ACCESSは、世界初の携帯電話IP接続サービス「iモード」を(株)NTTドコモと共同で開発したほか、テレビのリモコンについている、データ放送を楽しむための「dボタン」(ブラウザ)なども開発した会社だ。10年前よりサイネージ事業を開始している会社であるが、最近では韓国・サムスン電子社製のスマートサイネージ(以下、SAMSUNGサイネージ)を販売開始するなど、サイネージ分野に一層力を入れている。

SAMSUNGサイネージは、STB(セットトップボックス)不要でコンテンツ配信が可能で、スマートフォンやスマートテレビのように、ユーザーごとのアプリケーションやコンテンツを開発、配信することができる。今後はこれに、ACCESSが開発した「生成AIアバター」を組み込んだAIサイネージの提供も行っていく。同社の常務執行役員で、営業本部 本部長である鈴木英司氏は「生成AIアバター」について以下のように語る。

『現在はまだ製品化しておらず、コンセプト段階ではあるのですが、DSJ2023に参考出展したところ、大きな反響が得られました。「生成AIアバター」は昨今注目されている生成AIという技術、特に裏側で使っているのがChatGPTなの



鈴木英司氏(左端)をはじめ、ACCESSのメンバー。



「デジタルサイネージ ジャパン2023」のACCESSブース。スマートサイネージの高精細映像が印象的だった(写真中央)。

ですが、これに3Dアバターを組み合わせたサイネージとなっています。

一般的に生成AIというと、文字によるチャット形式でのやり取りが多いと思いますが、「生成AIアバター」は音声インターフェースにしてやり取りをします。裏側をChatGPTで動かし、表側は音声による会話形式で情報収集が可能な仕組みを実現しました。

DSJ2023の同社ブースでは、ユーザーの属性(年齢、性別など)に合わせてコンテンツやアバターがしゃべる内容を変え、最終的に広告に誘導していくというデモンストレーションを行っていた。鈴木氏の言う通り、現状ではアバターと自然な対話ができるサイネージは稀少で、多くの来場者が興味を示したようだ。

アバターの細かい設定はプロンプトで行う

これまでのアバターは、例えば「こう

いう質問が来たらこれを返してください」というようなプログラムベースで、会話できる範囲(質問に対して返す言葉)が決まっていた。一方、生成AIは、どんな質問が来てもその場で言葉を生成し、前後に繋がる言葉を考えた上で返答する。そのため、会話がすごく自然だ。

また、マルチ言語対応になっているのもポイントだという。ChatGPTは元々、翻訳マシンとして開発されているので、当然マルチ言語に対応する。コロナ禍も落ち着き、訪日外国人が増える昨今、何語でも対応できる「生成AIアバター」は魅力的だろう。鈴木氏は『専門のプログラミングコードで書かなくても、プロンプト(自然言語による指示文)でアバターの細かい設定が可能です。「あなたはどここの受付をしています」や「それ以外のことは答えないでください」などを自然言語で入れるだけで設定が完了。そのため、ITリテラシーの高い低いに関係なく、誰でも運用することができます」と、



「生成AIアバター」の表示画面(イメージ)。音声でのやり取りが可能なので、より人間との対話に近い感覚が得られる。

その運用の簡易性も伝えている。

さらに鈴木氏は『店舗の売り場などでは人手不足が問題になっています。そんな状況で、どこに何の商品があるのかなど店内の案内をするために、人が付いていって説明しなくてはならないことも多いと聞きます。「生成AIアバター」ならこのような問題を解決できます。他にも不動産の管理人さんなどもAI化できると思っています。アバターはご要望に応じて、自由に制作可能ですし、音声も変えられます。そしてキャラ設定は、プロンプトで行えます」と自信を示す。「生成AIアバター」は、2024年2月より提供開始予定だ。

「生成AIアバター」の海外展開も視野に

ChatGPTをはじめ、生成AIの進化と普及のスピードは驚くほど速く、今後さらなる発展が予想される。

『私がやりたいのは、話しかけてくるAIです。これまではそこにAIがあるとわかっているから、こちらから話しかけていたと思うんです。サイネージはカメラやビーコンなどを使うことで個人を認証できます。例えば私が売り場に入ってきた時に、私の属性に合わせて、アバターの方から話しかけるようにすることができます。実は、このようなデモ機はすでに作っており、テストを行っている

ところ。AIがそこにあると気づかなくてもいつの間にかAIとの対話が始まっている。「こんにちは」と言われたから「こんにちは」と返す。「今日も暑いですね。喉乾きませんか?」と言われて「そうだね」と答える。すると、後ろに飲み物を販売している店があるみたい。そういうかたちで広告が進化していくのではないかなと思っています」と鈴木氏。AIサイネージは、新たなフェーズへと進んでいるようだ。

なお、ACCESSはすでに海外にも目を向けている。海外ではサムスン電子社の液晶ディスプレイのなかにZoomや

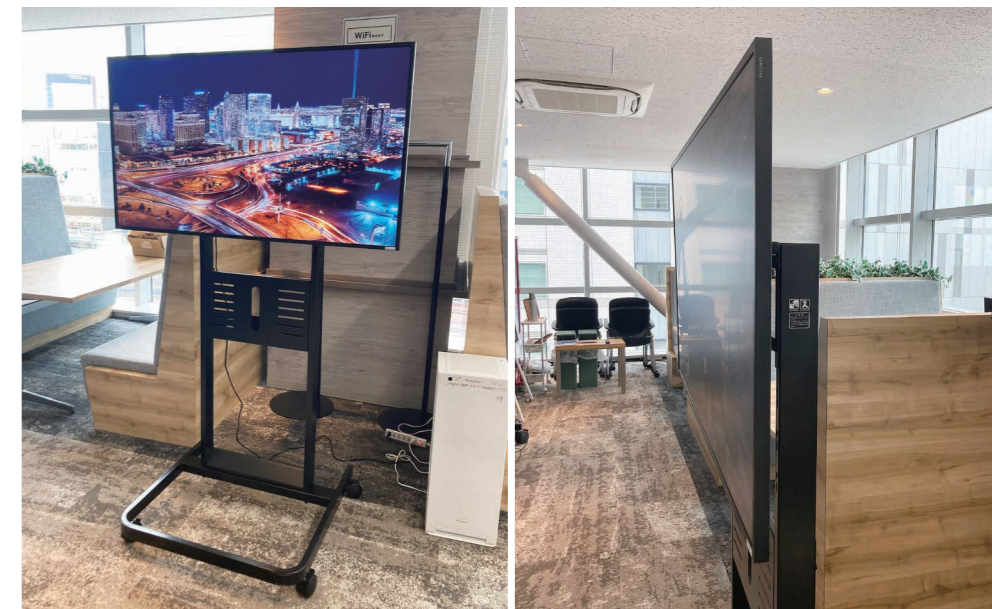
Microsoft Teamsが組み込まれていることが多く、同じように同社のアプリケーションを組み込むことができれば、「生成AIアバター」の海外展開もしやすくなるだろう。同社のグローバルな展開にも注目していきたい。

【問い合わせ】

(株) ACCESS
東京都千代田区神田練堀町3 大東ビル
Tel.03-6835-9222



samsung-signage-gr@access-company.com
公式 <https://ss.access-company.com/>
企業サイト <https://www.access-company.com/>



サムスン電子社製スマートサイネージ「QxCシリーズ」。厚みは僅か28.5mmで、壁への設置時も突出を最小限に抑えられる。